

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

シモン・ブドニと『教理問答』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1027

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



シモン・ブドニと『教理問答』

すでに「はしがき」で触れたように、シモン・ブドニ(生年不詳—1593)の生涯と活動についても、また『教理問答』の言語とその内容についても、われわれの研究はいまだに満足できる段階には達していない。しかし、現在までに判明した問題点を整理しておくことはこの研究を継続していく上で有効である。そこで、最終的にわれわれが何を目指しているのかということをおおむね予告しておくために三つの問題点をあげておく。

1 シモン・ブドニにたいする評価

シモン・ブドニはカトリック教徒とギリシャ正教徒が住民の大部分を占めていたリトアニア大公国(現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナの一部)でプロテスタントの布教活動を行なったという点ですでに特異な存在であった。また、彼はプロテスタントの中でもカルヴァン派からイエス・キリストの神性を否定する反三位一体主義に転身し、さらに神のみに神性を認める立場へと変節したために、プロテスタント内部で背教者と宣告されるにいたり、宗教家および聖書テキスト研究者としての生命を断たれてしまう。このためブドニにたいする評価には常に否定的なニュアンスが付きまといっている。

こうした否定的評価はおそらくブドニ存命中にすでに確定していたはずである。なぜならば、16世紀リトアニアの宗教事情は複雑かつ流動的であり、カトリックにギリシャ正教を吸収する動き(1596年のブレスト合同によって帰一教会が成立)や、カトリックによる反宗教改革運動とこれに刺激されたギリシャ正教の改革運動が入り混じっていた。この状況の中でブドニの主張は他のいずれの宗派から見ても極端なものに映るはずであって、当時の評価が後世にもそのまま受け継がれたと考えることには無理がないと思われる。

しかし、20世紀初頭からブドニとその著作を評価しようという機運が生まれたことも事実のようである。特に、聖書翻訳とこれらに付けられた注釈から伺うことのできる彼のテキスト批判の技量と東スラヴ俗語(ルテニア語)・ポーランド語・ラテン語を駆使した彼の文筆家としての能力にたいしては、研究者の宗教的信条に関係なく高い評価が与えられるようになってきている。なぜならば、ブドニの著作が16世紀リトアニアの宗教だけでなく、この複雑な社会全体を理解するための重要な資料と位置付けられるからである [Kot 1956, 63-64].⁽¹⁾

2 出生地と生年の問題

シモン・ブドニが『教理問答』を出版したのは1562年のことであるが、彼にかんする詳細な研究は1560年代後半以降の彼の活動と著作を対象にしている。シモン・ブドニの名前が初めて歴史に登場するのは彼がリトアニアのヴィルナ(現在のリトアニア共和国の首都ヴィルニユス)の教理教師に指名される1558年のことであり [Kot 1956, 64] [Frick 1994, 310], それ以前の彼にまつわる確実な記録は残っていない。実際に、『教理問答』出版に至るブドニの足跡を辿ることはほとんど不可能である。彼の生年と出生地についても確実なことはわかっていない。

しかし、一般にブドニは「1530年生まれ」とされることが多い。⁽²⁾ この「1530年生誕」説の根拠はおそらくスタニスワフ・コトの論文 [Kot 1956] に求めることができる。すなわち、

(1) 旧ソ連および現在のベラルーシにおいては、ブドニにたいする肯定的な評価を見ることができ。例えば、『ソビエト大百科』ではシモン・ブドニの項が「ベラルーシの文化活動家、人文主義者、ポーランド領のリトアニアとベラルーシにおける宗教・民族運動の積極的な活動家…」という記述で始まっている。また、ベラルーシにおいては歴史的な偉人として扱われており、1993年12月にその死後400年を記念した切手が発行されている。

(2) インターネット上に公開されているポーランドの百科辞典の一つに“Budny Szymon (1550-1593)”という記述があるのだから、500頁を超える『教理問答』を弱冠11歳の少年が著し、なおかつ当時のリトアニアに導入されて間もない印刷術を利用して出版することはあまりに真実味が無い(<http://wiem.onet.pl/wiem/00b51a.html>)。

1554年10月9日付けのクラクフ・アカデミーの学生記録に“Simon Alberti de Budy dioc. Plocensis”という記録がある。この日付と記載事項からこの聴講生にわれわれのシモン・ブドニを認めることが可能となる。当時の習慣では13歳で人文諸学[Studium artium]を学び始めていたので、これから想像するに、ブドニは1530年頃に生まれ、クラクフでの勉学にはほぼ7年から10年ほど費したと思われる。[Kot 1956, 65]

つまり、現在のポーランド北西部に位置するマゾヴィア地方プウォツク(Płock)教区内のブディ出身でアルベルトの息子シモンが1554年にクラクフ大学に在籍していたという記録が残っているのである。さらに、やがて反三位一体運動の有力な担い手となる複数の人物が60年代前半までにクラクフで学んでいた[Kot 1956, 65]ことも“Simon Alberti de Budny”なる学生をシモン・ブドニと特定するための裏付けとなっているに違いない。

そして、上記の記録はもう一つの情報を提供している。もしこれがシモン・ブドニだとすれば、その出身地はマゾヴィアであり、彼はポーランド人だということになる。実は、この出生地の問題は次節で扱う『教理問答』の言語の問題とも密接に関係している。

もっとも、スタニスワフ・コトの論文を強く意識しながら、シモン・ブドニの歴史的意義を評価する研究をおこなったデイヴィド・フリックが指摘しているように [Frick 1994, 309], ブドニがマゾヴィア出身であるという推定についてコト自身はそれほど確信をもっているわけではないようなのである。

シモン・ブドニは情熱的に文筆にいそしみポーランド語の達人であった。彼は1572年版聖書の読者に次のように説いている。「しかし、ポーランド語に関していえば、わがポーランド人が一般にその極めて狭い祖地の言語を使用していることを知っておくべきである。しかし、わたしはそのしきたりには従わなかった。なぜならば、わたしは一つの地方や一握りの人々

のために翻訳をしたのではなく、全ての人々のために行ったからである。このため種々の方言の特色にはまったく気を使っていない。読者は大ポーランドやクラクフ、そしてマゾヴィアやポドリャヒやサンドミェシで使われている言い回しや、ルテニア(=リトアニア領ベラルーシ及びウクライナの一部 — 岡本注)で使われているいくつかの言い回しでさえわたしの訳文の中に見つけるであろう」。事実ブドニの言語に特徴的なのは、表現や言い回しに稀なものとの的確なものといずれも大量にあることである。辞書の作成が望まれるところである。ルテニア語の表現が使用されていることから、ブドニがルテニアの出身だとも仮定しうる。[Kot 1956, 113]

一方、ベラルーシではブドニをベラルーシが生んだ偉大な思想家として扱っている(脚注(1)参照)。公式に認められている生誕年はやはり1530年である。一説によれば、ブドニはベラルーシのギリシャ正教徒の家庭に生まれ、名門大貴族ハドケーヴィチ(ホドケーヴィチ)家の屋敷で育ち、クラクフ・アカデミーで高等教育を受けたという。しかし、ベラルーシで生まれ、ハドケーヴィチ家で養われたことに十分な根拠があるか否かについてはわからない。⁽³⁾ また、クラクフ・アカデミーに在籍した時点から伝記上の一致をみることができるのであすが、学籍記録がマゾヴィア出身説の根拠となっていることを考慮するとベラルーシ出身説を主張するためには相当に説得力のある証拠が必要であると思われる。

結局のところ、シモン・ブドニの出生地と生誕年にかんしては、例えば『ブ

(3) インターネット上に公開された“Virtual Guide to Belarus”に次のような記述がある。
“Symon Budny was born in an Orthodox Christian family near Zabłudnae and grew up at the court of belarusian [sic] magnat family of Hadkevich [sic]. He had received his highest education in Krakow Academy...” (<http://www.belarusguide.com/culture1/people/Budny.html>).

仮に‘Zabudnae’がポーランド名 Zabłudów、帝政ロシア時代の Забудово に一致するのであれば、これはベラルーシ西北部グロドノ県(北にリトアニア、西にポーランドと国境を接している—当時はリトアニア領)の町で、マゾヴァのプウォツクとリトアニア領ネスヴィジとの間に引いた直線上のほぼ中間に位置している。しかし、上記の記述ではブドニが当時のリトアニアで生まれ、リトアニアの名門貴族であるホドケーヴィチ家と関係を持った経緯と根拠には触れられていない。

ロックハウス・エフロン百科事典』(1890年版)のように、「生誕年不明．マゾヴィア人あるいはリトアニア人」という説明がもっとも穏当であろう。⁽⁴⁾

3 『教理問答』のテキストおよびその言語と内容の問題

3.1 使用言語について

テキストに使用されている言語はポーランド・リトアニア領の東スラヴ人地域で発達した世俗語(проста мова)である．先にも述べたようにブドニ研究は16世紀の60年代後半以降の活動と著作に重点が置かれている．ブドニの主な著作のうち東スラヴ語で書かれたものは『教理問答』以外に『罪深い人間の神の前での弁明について』(*О оправдании грѣшнаго челоуѣка прѣд богом*—1561年)しかない。⁽⁵⁾ キリスト教に関係した内容のテキストを教会スラヴ語ではなく世俗語で書く試みはすでに14世紀末から行なわれていたようであるが、ブドニの『教理問答』は現存する世俗語教会文献としては『ペレソープニツァ福音書』(1556-1561)と並んで最古の部類に属している [Ефремов 1995, 118].

もっとも世俗語文献とはいいいながら、旧・新約聖書からの引用部分は教会スラヴ語が使用されている．かえってこのことが世俗語と教会スラヴ語を比較する資料としてのこの文献の価値を高めているとすることができる．

3.2 『教理問答』の内容について

われわれの研究がいまだにテキストの内容を検討するまでに至っていない以上、われわれにこの問題に立ち入る権利はない．しかし、不思議なことにブドニのこの著作は「ルター派教理問答」と呼ばれることもあり、「カルヴァン派

(4) 「リトアニア人」(литвин)という表現は必ずしも民族的な呼称ではない．特に、16世紀のベラルーシは“Литовская Русь”(リトヴァ・ルーシ)であって、住民はリトアニア人・東スラヴ人の区別なく「リトアニア人」と呼ばれており、“литовски”(「リトアニア語で」)と“русски”(「ロシア語で」)は共に現地の東スラヴ世俗語を意味する同義語であった．

(5) それ以降のものはポーランド語からラテン語で書かれている．この使用言語の変更は、彼が自己の主張を訴える範囲をリトアニアからポーランド・リトアニア連合王国全土へ、そして西ヨーロッパにまで拡大しようという意図を持っていたことと関係している

教理問答」と呼ばれることもある。シモン・ブドニの名前が初めて記録に現われるのは、彼が「スイス式プロテスタント礼拝」(＝カルヴァン派)を導入したヴィルナ県の教理教師に任命された時であるので(1558年1月11日の記録)、「カルヴァン派教理問答」と考えられるのは当然のことであろう。⁽⁶⁾しかし、E・F・カールスキーはI・カラターエフの書誌記述 [Каратаев 1878, 108] に従って“Лютеранский катихизис”と呼んでいる [Карский 1962]。また、1994年に出版されたブドニのポーランド語訳聖書の復刻本に納められた注釈の序文のなかで編者は「1562年にマルティン・ルターの大教理問答のベラルーシ語訳が世に出た」と述べており、問題の『教理問答』がルターのものであると断言している。もっとも、E・F・カールスキーの論文が出版される以前にI・カラターエフは再度書誌記述を出版しており [Каратаев 1883]、そこではブドニの『教理問答』について前版の解説がそのまま繰り返されているのであるが、“(Лютеранский)”つまり「ルター派の」というただし書きのみ削除されている。このことが何を意味しているのかはわからない。実際のところ、この『教理問答』は純粋な問答形式を採用しているという点で、ルターの『小教理問答』に似ており、分量の点でルターの『大教理問答』に匹敵している。

3.3 本書で使したテキストについて

本書の底本となったのは国立モスクワ大学学術図書館が所蔵する『教理問答』をマイクロフィッシュ化したものである。ブドニ『教理問答』の書誌情報の基礎となっているのは1878年に出版されたI・カラターエフの書誌記述 [Каратаев 1878]である。これによると、『教理問答』は各葉の表ページ右下に振られたキリル文字による数字の続き具合を基準にすると、三つのグループに分けられる。すなわち、第一のグループは6葉から成り立っており、第1葉

(6) G・ヴェルナツキー、『東西ロシアの黎明—モスクワ公国とリトアニア公国—』(原題: George Vernadsky, *Russia at the Dawn of the Modern Age*. New Haven, 1954—松木栄三訳, 1999年), および『ウクライナ・ソヴィエト百科辞典』第2巻(Українська радянська енциклопедія. Том. 2. Богуслав-Волочицьк)では「カルヴァン派」と明記している。

に表題，第2-6葉にヴィルノの知事でありブドニの後援者でもあったミコライ・ラヂヴィルにたいする献辞と同書を出版するに至った経緯が書かれていた。次に，第二のグループは序文となっており，これに3葉を要している。そして，残りの251葉が教理問答の本文(四部構成)に充てられている。1ページあたりの行数は17行であるが，序文のみ26行で組まれている。印刷に使用された活字は東スラヴ地域で最初に活版印刷を行ったフランチスク・スコリーナのものに似ているため，カタターエフは「同一の文字で印刷されたとは言わないまでも，スコリーナの出版物が『教理問答』の雛型になったはずである」と述べており [Каратаев 1878, 137]，古文字学の権威でありブドニ『教理問答』の本格的な言語研究を始めて行ったE・F・カールスキーもこの意見を肯定している(図1および図2を比較せよ)。

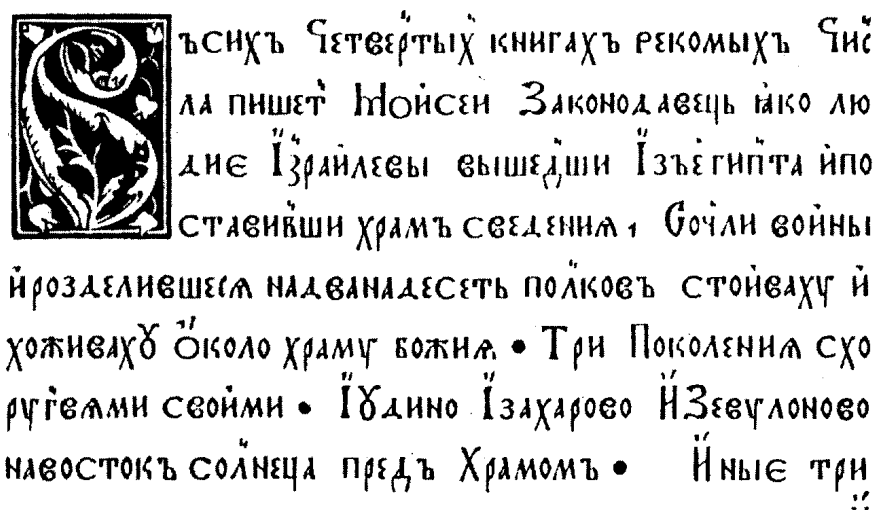


図1：スコリーナの活字

一方，モスクワ大学学術図書館の書誌記述[КККП, 32]によると，われわれの底本には第一のグループの6葉と第二のグループの3葉がすべて欠落している。また，第三のグループ，すなわち教理問答の本文のうち46葉が欠落している。これらのうち第二グループの3葉と第三グループの9葉が「18世紀の行書体(полуустав)によって」補われているものの，ブドニの『教理問答』テキストの全体像を提示するには相当の問題を含む文献であることは認めざるを得

ない。(7)

ПЫТЯНЬЕ.
Г҃яко тоѣ маю розумѣти;
О҃КЯЗЪ.
Г҃яко ѹ первомъ словѣ дѣлѣ намъ богъ нау
ку, ꙗко емяеть быти ншоѣ сердце, а въ
второмъ словѣ, ꙗко и тѣломъ емоу сѣмо
му служити вси повинни; Тако ѹ томъ

図2：「教理問答」の活字書体

しかし、実際に底本テキストを点検した結果、[КККП]の記述とのあいだにいくつかの相違があることが判明した。それらは以下の通りである。

(1) 補完されたテキストの分量が書誌記述とは違っている。実際にわれわれが確認した結果、第二グループと第三グループに属するテキストは全部で45葉復元されている。この36葉の差は第190葉以降の補完部分が知られていないことに起因しているので、これらは[КККП]が出版された後に発見されたものなのかもしれない(補完部分の筆跡については次項で述べる)。

(2) 書誌記述に記載されている「18世紀の行書体によって」補完されたテキストには実際に二種類の筆跡が認められる。すなわち、43葉にはそれぞれの文字の均質性が保たれた字体が使用されている(図3「第一の筆跡」)。一方、残りの二葉はこれとは全く趣の違う筆跡(図4「第二の筆跡」)で書かれているのである。いずれの異字体テキストも先に述べたモスクワ大学図書館による欠損

(7) なお、I・カラターエフによれば、ブドニの『教理問答』は四部(サンクトペテルブルグとプラハに一部づつとモスクワに二部)保存されているということであるが、モスクワ大学所蔵本がこれら(特にモスクワに保管されている二部)のうちに含まれているのか、あるいはそれら以外のものであるのかが明確ではない。モスクワ大学学術図書館の書誌記述[КККП]には「1949年に国立歴史博物館(ГИМ)より移管」とあるので、カラターエフが紹介した四部のうちの一つである可能性が強いのであるが、同書の由来についても研究の余地がある。

部分の算出作業が行われた範囲に存在しているので、どちらも18世紀行書体と
 いうことなのであろうか。

ВОПРОСЪ .
 Чѣмъ виненъ имѣти хрѣстіанинъ .
СЛѢДЪ .
 Четыре рѣчи имѣти , и подле того
 жити имать . Первая заповѣдь ;
 или заповѣди . другая познаніе
 шѣры . третія мѣста сѣна . че-
 твѣртая тайны хрѣстоу .

図3：第一の筆跡(手書き)

(3) 第一の筆跡のテキストは一ページあたり20行であり、第二の筆跡のテキ
 ストは二葉の三面が17行で一面が18行となっている。モスクワ大学図書館の書
 誌記述には「26行および17行」とあるのだが、これは本来の体裁であって、26
 行で組版された序文を欠いたモスクワ大学本を反映していない。同文献では序
 文が第一の筆跡で書かれているので一ページに20行(稀に19行)しかない。

Вопросъ .
 Которыя сѣтъ дѣла противъ толихъ при-
 казанью , которыя сѣтъ заслужитъ ;
Слѣдъ .
 Много сѣтъ грѣховъ на противъ толихъ
 перваго словѣ или казанью , которыя
 сѣтъ на противъ шѣры и страха бжїа .

図4：第二の筆跡(手書き)

(4) 本来26行および17行で組版されたテキストのほとんどが一ページ20行で復元されたために、原本とページのずれが生じてしまった。例えば、序文はもと3葉であったはずなのだが、これを復元するために5葉（4葉の両面と1葉の片面）が費されている。⁽⁸⁾ また、教理問答本文は [Каратаев 1878] では251葉存在していたことになっているが、モスクワ大学本は第234葉から第252葉まで連続して番号が付けられている上に、番号のない第253葉で終わっている（なお、234-253葉はすべて第一の筆跡による補完テキストである）。そして、第253葉の裏面には本来第251葉裏面に書かれていたはずの跋文（последствие）がある。

このようにブドニ『教理問答』モスクワ大学本は後世になって追加されたテキストが全体の約20%を占めている文献であるので、本来の活字テキストと補完テキストの違いについて比較しておく必要がある。もっとも、正書法については、一方が物質的・財政的な制約を受ける活字印刷であるため、単純に比較することはできない。そこで、最も顕著な違いが現われることが期待される語彙と形態の違いを検討しておく。

先ず、書体の違いにもかかわらず二種類の補完テキストには明らかに活字テキストと違った語彙的特徴がある。テキストの大部分は『教理問答』という書名が示すように問答形式になっており、活字で組まれた本来のテキストでは「問い」が *пытанье*、「答え」が *отъказъ* となっている。これにたいして補完テキストは多くの場合活字テキストの内容を継承しつつも「問い」と「答え」にあたる単語に限って、それぞれ *вопросъ* と *отвѣтъ* に代えられているのである。

пытанье はこれとほぼ同じ形の単語が、現在でもポーランド語・ベラルーシ語・ウクライナ語で「質問」の意味で使われている（P. pytanie, Br. pytanie, U. питання R. вопрос）。また、「答え」を意味する単語は P.

(8) 3葉の両面に26行で印刷されていたとすると、全行数は $26 \times 6 = 156$ となる。1行あたりの文字数に大差がないと仮定して、これを一面20行で再現すると $156 \div 20 = 7\frac{16}{20}$ なので、少なくとも4葉必要となる。

odpowiedź にたいして, Br. адказ, U. відказ である(↔R. ответ—ただしウクライナ語には відвіт, одвіт<OR. отъвьтъ の存在も認められる)。一方, OR. pytanie は「審問, 尋問」の意味でしか使われない。そしてOR. отъказъ はリトアニア領でのみ「返答」の意味を持ち, 北東ルシでは「解雇」の意味で使われていたようである。⁽⁹⁾ вопросъ と отъвьтъ は明らかに教会スラヴ語の語彙であるので, ブドニの使用した世俗語はポーランド語とも教会スラヴ語とも違った独自の体系を志向していることがわかる。欠損テキストを補完した人物はおそらくロシア人であって, 少なくとも視覚上目立つ大文字の「問い」と「答え」だけは教会スラヴ語形に修正したと考えられる。

これらの語彙以外にも本来のテキストと補完テキストの間にはいくつかの言語的な相違点が見られる。幸いなことにカラターエフの書誌記述 [Каратаев 1878, 138-139] に序文が引用されているので, 補完テキストと比較することができる (表1参照)。

それぞれのテキストに採用されている正書法を無視すれば, 両者は一部に語順の違いが見られるものの, 同じ内容をほぼ同じ語彙で伝えており, 顕著な違いは以下の三点のみである。

- * 活字テキストの序文冒頭部にある “языка руского прѣдъсловіе” から “языка руского” が削除されている。
- * тысени 「1000」 [複数主格] が тысящи に書き換えられている。
- * ласка 「慈悲」 が милость に書き換えられている。

(注記) 表1に例示されたテキストにおいてイタリック体で表記された文字は本来行の上に小さく書かれた文字であり, 括弧の中にある文字は実際のテキストでは省略されている。

しかし, 読み分け記号(diacritics)は, 活字テキストと手書き補完テキストでは全く異なる原則にもとづいて使用されている。双方のテキストに共通してい

(9) 中世ロシア語の語義については И.И.Срезкевский, *Словарь древнерусского языка. I-III*. Москва 1989 (Репринтное издание) 参考にした。

表1 : テキスト比較

本来のテキスト

Къ всѣмъ благовѣрнымъ христіаномъ языка русскаго предъсловіе въ Катихисію.

Катихисісъ слово ссть греческаго языка, сказует же ся на словенскую рѣчь оглашеніе или гласомъ ученіе. Вѣдомо бо маеть ижъ Ап(о)с(то)ли и ихъ ученици не тако скоро и не такъ латвѣ от Еллинъ или жидовъ в'вѣре х(ристо) вои приступующихъ, таитами с(вя)т(ы)ми служили. И окр(е)стильубо Петръ и иншіи Ап(о)с(то)ли на д(е)нь съшествіа с(вя)т(а)го д(у)ха от люлеи і(зура)илевыхъ три тисечи. Але умилившись с(е)рдцем и любезно прием'шихъ слово окретиль филиппъ иже от седми діаконъ парици Мурин'ское каженика...

Наболеи четвер'тая часть. се ес(ть) о с(вя)томъ крешеніи, и о вечери сына божіега. помысли можемъ оприч'ную книж'ку выпустити. Ласка г(о)с(по)да нашего (ису)с(а) Х(рист)а съ всеми вѣр'ными. аминь.

Псанъ у Клец'ку подъ лѣты въплошеніа г(о)с(по)да и спаса и б(о)га нашего (ису)с(а) Х(рист)а. аФѣв. Іюніа і дня.

モスクワ大学本の補完テキスト

КАТИХИСИСЪ. или Гласомъ Ученія. Ко всѣмъ бл(а)говѣрнымъ хр(и)стіаномъ ПРЕДИСЛОВ Е.

Катихисисъ есть слово греческаго языка, сказуетъ же ся на словенскую рѣчь оглашеніе. или Гласомъ ученіе. Вѣдомо бо маеть быть. иже ап(о)с(то)ли и ихъ уч(е)н(и)цы. не тако и не такъ лятвѣ от жидовъ к' вѣре х(рист)овой приступующихъ, таитами с(вя)ми служили. и окр(е)стильубо петръииншіи ап(о)ст(о)ли. на д(е)нь сошествія с(вя)таго д(у)ха от люлеи І(зура)илевыхъ три тысящи але умилившись с(е)рдцем и любезно приемишихъ слово. Окрестил убо Філіппъ иже от седми діаконъ ц(а)р(и)цы муринской каженика...

на болеи четвертая част се есть о с(вя)томъ крешеніи, и о вечери с(ы)на б(о)жія помыслити можемъ опричную книжку выпустити. М(и)л(о)сть г(о)с(по)да н(а)шего и(су)с(а) х(ри)ста. со всѣми вѣрными. аминь.

Писанъ в' клетку подъ лѣты воплошенія г(о)с(по)да и спаса нашего и(су)са хр(ис)та. аФѣв. Іюніа і дня.

る読み分け記号は、氣息記号(´)⁽¹⁰⁾と二種類のアクセント記号(´ および `),
そして氣息記号とアクセントの組合せ(˘ および ˘)である。

活字テキストにおける読み分け記号の使用法は次のようになっている。

1. 二つの母音字が連続する場合、二番目の母音字にアクセント記号が付けられる。

(a) 母音字連続で語形が終っている場合、鈍アクセント：мою́, её́, она́, людей́ 等。

(b) 語中に母音連続がある場合には鋭アクセント：злодѣ́йство, призы́вае́тъ 等。

従って、語中と語末に母音連続を持った語形には二つのアクセントが付けられることになる вои́ною́。

2. 語頭にある母音字には氣息記号が付される：я́ко, о́ную, о́пять 等。

ただし、母音字連続で語形が始まる場合はいずれかの母音字に氣息記号とアクセントが付けられる：о́учя́тъ (=учя́тъ), ióвѣ 等。

3. 母音字一つのみからなる語形には、氣息記号が書かれるが (я́ [人称代名詞 1 人称単数主格], ѝ́ [接続詞]), 人称代名詞対格形に限って氣息記号とアクセントが文字の上に書かれる (я́, я́, ѝ́, ё́ 等)。

4. 氣息記号は連続する母音文字の二番目の文字の上に書かれることがある：злодѣ́ями, малу́ю, своё́, своё́я 等。

люде́й, злодѣ́йство, призы́вае́тъ, вои́ною́ 等の語形のアクセントの位置が示すように、活字テキストのアクセント記号は語形の力点を必ずしも表しておらず、氣息記号と同じ機能を持っていることが分かる。

一方、補完テキストでは以下の使用原則に従っている。

1. 原則として語末の母音字には鈍アクセント、それ以外の位置の母音字には鋭アクセントが付されている。そして、いずれのテキストでもアクセントの

(10) 活字テキストの氣息記号はギリシャ語のものに似た形状を持っている(´)。

位置は語形の力点を表している： держáли, котóрые, сúть, с(вя)тѣя,
тогò, томú, свою̀, для̀ 等。

2. 氣息記号が語頭の母音字に書かれ、その文字が力点を伴うときにはアクセント記号も書かれる： ѿбо, ѿко, ёсть 等。

3. 母音字の直後にある半母音化した и (/j/ < *jb)の上に記号が書かれる： речей, седмый, лепей 等。ただし、(о) спасеніи や (бози) иніи (развъ мене) のように /i/ (< *ji)を表す и にこの記号は書かれない。

つまり、補完テキストに採用されている読み分け記号の用法はロシア教会スラヴ語のものとはほぼ同じである。

以上のことから、補完テキストの作成者達は欠損部分の復元に際して、原テキストをもとにして書写したのだが、読み分け記号についてはロシア教会スラヴ語の使用法を守ったと考えてよいようである。そして、“ласка г(о)с(по)да нашего і(исуса) х(рист)а съ всеми вѣрными. аминь”「われらが主イエス・キリストの慈悲が正しい信仰を持つ全ての人々とともにありますように。アーメン」)のような教会スラヴ語の文脈に南西ルシ世俗語 ласка⁽¹¹⁾が使用されたことにおそらく違和感があったので、教会スラヴ語形の милостьに書き換えたのではないかと思われる。逆に、世俗語の文脈にあると判断された語形については、къ вѣмь → ко всѣмь, съшествіа → сошествіа, вѣпрошеніа → воплошеніаに見られる ъ → оの書き換え、つまりロシア的な「世俗化」が行われている。原文の序文冒頭部に書かれていた “языка руского предъсловіе”「ルシ語(ロシア語)の序文」という部分が補完テキストでは単に “предисловіе”「序文」となってしまったも活字テキストに使用された基本的な言語が補完テキスト作成者の言語感覚にあった世俗語すなわち「ルシ語(ロシア語)」のイメージと違っていからに違いない。

(11) Br. ласка, U. ласка, P. łaska.

結局、モスクワ大学本は少なくとも教理問答本文の内容を知るために十分な分量のテキストが再現されていると考えてよさそうである。ただし、活字テキストと手書きのテキストの間には言語的違いが存在する可能性は否定できない。

(岡本崇男)

参考文献

- [БСЭ] *Большая советская энциклопедия. 4. Брасос-Веш.* 3-е изд. Москва, 1971.
- [Frick 1994] David A. Frick, "The Biblical Philology of Szymon Budny: Between East and West." [PolBib, 307-349].
- [Єфремов 1995] Сергій Єфремов, *Історія українського письменства*. Київ, 1995 (Kyiv-Leipzig, 1919).
- [Каратаев 1878] И. Каратаев, *Описание славяно-русских книг, напечатанных кирилловскими буквами 1491-1730. Часть 1*. Санкт-Петербург, 1878.
- [Каратаев 1883] И. Каратаев, *Описание славяно-русских книг, напечатанных кирилловскими буквами 1491-1652 г.* Санкт-Петербург, 1883.
- [Карский 1962] Е. Ф. Карский, "Два памятника старого западнорусского наречия: лютеранский катехизис 1562 г. и католический катехизис 1585 г." В кн.: Е. Ф. Карский, *Труды по белорусскому и другим славянским языкам*. Москва, 1962. 188-207.
- [Kot 1956] Stanisław Kot, "Szymon Budny. Der größte Häretiker Litauens im 16. Jahrhundert." *Wiener Archiv für Slaventums und Osteuropas, Bd. II. Studien zur älteren Geschichte Osteuropas, I. Teil*. Graz-Köln, 1956. 63-118.
- [КККП] И. В. Поздеева, И. Д. Кашкарова, М. М. Лепенман, *Каталог книг кириллической печати XV-XVII вв. в Научной библиотеки Московского университета*. Москва, 1980.
- [PolBib] Hans Rothe, Friedrich Scholz (hrsg.), *Biblia Slavica. Serie II: Polnische Bibeln. Bd. 3. Simon Budny, Biblia 1572*. Paderborn-München-Wien-Zürich, 1994.